

(抄録)

研究課題名：おとなのストレスは子どもに伝播するのか？：子ども，保護者，担任教諭
のストレスの関連

研究代表者名：野井真吾

目的：子どもの元気が心配されて久しい。だが一方で，子どもは「社会を映す鏡」といわれることを勘案すると，子どもの元気のなさはおとなの元気のなさを反映した結果と解することもできる。実際，われわれの検討では，子どもの生活習慣の背景には保護者の生活習慣が存在し，保護者の生活習慣の背景には保護者を取り巻く社会的資本が関与している可能性が確認されている (Noi et al., 2021)。このような事実は，年々深刻化の一途を辿るメンタルヘルスの問題でも同様といえよう。そのため，おとなのストレスが子どものストレスに悪影響を及ぼす可能性は否定できない。中でも，子どもが多くの時間を過ごす家庭や学校におけるおとなのストレスの影響は小さくないと考える。そこで本研究では，子ども，保護者，担任教諭のストレス評価をおこない，三者の関連を検討した。

方法：対象は，東京都世田谷区のA小学校に在籍する小学4，5年生とその保護者287組および担任教諭8名であり，調査は，2022年9月28日（水）および9月30日（金）に実施された。調査では，子どもを対象に質問紙を用いた睡眠状況（前日の就床時刻，当日の起床時刻）調査と唾液中コルチゾル濃度測定を実施し，前日の就床時刻と当日の起床時刻の記録からは，夜間の“睡眠時間”も算出した。併せて，保護者を対象に悩み・ストレスの有無に関するアンケート調査，担任教諭を対象に唾液中コルチゾル濃度測定も実施した。唾液採取は，唾液採取器具 (Sarstedt Co., ドイツ) を用いて，1時限目開始前 (8:40) と昼食前 (12:20) の2時点に行い，分析は化学発光免疫測定法 (chemiluminescent immunoassay: CLIA) にて実施した。なお本研究は，日本体育大学における人を対象とした実験等に関する倫理審査委員会の承認を得て実施された (承認番号：第022-H107)。

結果：本研究では，唾液の検体量不足例や検出不能例を除き，子ども283名から得た566検体，担任教諭6名から得た11検体での検討が可能であった。そのうち，子どもの420検体，担任教諭の6検体は，唾液中コルチゾル濃度が測定感度未満の低値を示した。また，子どもの唾液中コルチゾル濃度と保護者のストレス，担任教諭の唾液中コルチゾル濃度との間に統計的に有意な関連性は認められなかったものの，12:20時点の子どもと担任教諭の唾液中コルチゾル濃度は両者が関連する可能性も示された。

結論：以上のことから，子どもと子どもを取り巻くおとなのストレスが互いに伝播しうる可能性をさらに追究するべく，低濃度群に分類された検体を細分化して検討することが今後の研究課題であるとの結論に至った。